

による「母親-きょうだい間の相互作用に対する乳幼児の反応」の研究結果は、この学部発行の特定研究報告書（84年）に一応載せてあるが、正式にはまだ公刊の過程にある。引き続き、母親-きょうだい-乳児の三者関係についての短期縦断研究を行っている。11か月児を第2子としてもつ家族50組以上の協力が得られた。この研究には、上記3氏のほかに、この7月末まで11か月間私のもとに来ていた Fogel パーデュー大学助教授にも参加してもらった。かれが開発した二者間の相互作用過程のマイクロ・アナリシスのプログラムを、三者間の相互作用に適用することになっている。

ついでながら、Fogel さんとは保育所における幼児-乳児の nurturant な相互作用の比較研究をすることにし、院生（加藤教子）にも加わってもらって研究を進めている。なお、nurturance に関しては、「日本において nurturant になって行く過程」という論文を書き、来年にローレンス・アールバウム社から出る本の1つの章となるはずである。また、家庭を中心とした「環境・経験変数の構成」（朝倉書店、1982）、それに「家庭環境」（第一法規、1983）という分担執筆の論文が出た。

小児心身症の家族的背景の研究も続行中である。そのために構成したインヴェントリー（FRI）については、日本教育心理学会第26回総会（84年9月、京都）で久世敏雄・宮川充司と共同で発表する。現在は、国立名古屋

病院を足場にして症例研究を重ねている。それには院生（内山伊知郎）の協力を得ているが、各方面から請求・問い合わせがある FRI の手引きを出すところまで、まだ自信がついていない。

最後に、第17回家族社会学セミナー（84年7月、瀬戸市）に招かれたことは、隣接領域の研究として尊敬しつつも十分な接触をもっていなかった私にとって、たいへん有意義な経験であった。今後の研究に生かしたいと願っている。

〔その他〕 '83年8月下旬から9月初めにかけて、コーネル大学の Bronfenbrenner 教授を招き、名古屋で講演会、セミナー、討論の機会をもてたことは、かれや私にとってだけでなく、教室内外の多くの人にとって有益であったと喜んでいる。かれが学術振興会に提出した報告書では、名古屋のことをほめすぎている。しかし、それは1つの目標を示唆しているのだと受け止めれば意味があろう。上記の Fogel さんが11か月にわたりフルブライト研究員としておられたのも、お互いにとって大きな意味があった。非常に困難ではあるが、比較文化的研究をもめざしたい。この点に関して、ある日米比較についてのアメリカ人の論文に私がコメントしたものが、9月の *American Psychologist* に出る。また、発達と知能の2章を担当した概論書も出た（有斐閣、1984）。

（1984年8月16日）

研究経過報告—昭和58年度

田 畑 治

1. カウンセリング過程の研究。この領域では「フォーカシング」に関する研究発表を2題行った。一つは「フォーカシングを適用した仮面うつ病婦人の心理治療過程」（日心第47回大会発表論文集、早稲田大学、昭和58年9月、742頁）であり、もう一つは「児童期に母親喪失体験をもつ中年婦人のカウンセリングの特徴」（日教心第25回総会発表論文集、熊本大学、昭和58年9月、830-831頁）として報告し、フォーカシングの「ショート・フォーム」（略式法）の可能性と限界を明らかにすることができた。なお、これらを一本化して、近年筆者が比較的对象を多くしてきている「中年女性」の生き方の問題ともからめて、専門誌にまとめて報告できれば、と考えている。

この領域でもう一つは「夢分析」に関するものである。この年度は2題発表することができた。一つはある重症

対人恐怖症者のもので、すでに本紀要に発表済みである（名古屋大学教育学部紀要—教育心理学科、第30巻、99-119頁所収、昭和58年12月）。もう一つは「性的問題をもつ中年婦人の夢とカウンセリング」というテーマで発表し、慶応大小此木啓吾先生のコメントをうける機会を得た（京大—泊臨床心理学研究会、昭和59年2月）。なおすでに終結している他のケースも含めて、これらは本研究紀要第31巻に、夢分析の論文として投稿する運びになっている。

2. 心理臨床家の養成、教育・訓練の問題。

この領域では、亀口憲治氏（福岡教育大）の「システムミック家族療法を用いた登校拒否児の事例—逆説的課題の有効性—」（日心臨第2回大会、中京大学、昭和58年11月）のコメンテーターをする機会を得て、筆者自身この療法の独自性と可能性について学習することができ

た。もう一つは伊東博著『ニュー・カウンセリング』（誠信書房、昭和58年刊）の書評をする機会を得た（学習指導研修、1983年12月号、85頁）。心理臨床家の教育・訓練、とりわけカウンセラーの教育・訓練に、“ノン・バーバルな演習”を一定期間組み込むことが不可欠と考えているだけに、氏の5領域（感覚の覚醒、からだが動く、自己の覚醒、対人関係、表出・表現）はユニークであり、有益なものであることを論評した。

前年にスタートした日心臨学会は、心理臨床家の養成、教育・訓練をどうすべきかについての検討課題を背負っている。この第2回大会で「心理臨床の専門性と教育・訓練」のシンポジストとして、本学教育学部での実状と問題点を提起した（日心臨第2回大会職能委員会企画シンポジウム、中京大学、昭和58年11月）。

3. 臨床青年心理学への接近。

これは、過去数年に涉って、共同で取り組んできたものであるが、この年度は、個人研究として発表したにとどまった。一つは“Some aspects of ego-identity in the Japanese adolescent observed through psychotherapy.”（The 10th World Congress of Social Psychiatry. September 6, 1983. Osaka. Proceedings pp. 117 - 119.）であり、もう一つは「臨床心理からみた現代青年像——あるウワサ妄想に陥った高校生の心理療法過程を中心にして」（青年心理学研究会編『現代青年の心理』福村出版、昭和58年11月、70-107頁所収）であった。前者では、高校進学率が1980年代に90%を越えた状況を踏まえ、男・女それぞれの生徒が発達的に不可避免地に遭遇する課題に直面し、問題を生じさせたケースをとりあげ、その心理治療的援助を通して、それぞれのケースが達成した課題（自己変容、自我同一性、同性同輩関係、進路選択など）を考察した。これは国際会議であり、外国の研究者の“同一性混乱”の問題も多彩であり、とても興味深いシンポジウムであった。後者は、登校拒否のケースであるが、精神病理学的には、“境界例”であり、治療者自身も相当に疲労を覚えたものである。境界例が増加してきていると識者の中で論じられているのであるが、その治療過程を詳述し、青年心理学への一知見を加えられれば、と期待している。

なお、思春期、青年期の登校拒否をめぐる論文として、つぎの2つを依頼されてであるが発表した。

「思春期の行動病理（2）登校拒否」（教育と医学、第32巻2号、昭和59年2月、60-66頁）、「カウンセリング（特集登校拒否—どう治療したらよいか—）」（サイコロジ、No.42、昭和58年9月、40-43頁）。

4. グループ・アプローチ、エンカウンター・グループ、学生相談に関する実践研究。

本学学生相談室主催の第7回自己発見のための合宿セミナーが開かれ、今回もファシリテーターとして参加し再び体験を深めることができた（「蓼科でのグループの魅力」昭和58年度厚生補導特別企画、昭和59年3月、17-20頁所収）。

その他に学生相談に関するものとして、シンポジウムの司会「大学教育と学生相談の現代的課題について」（第17回学生相談研究会・学生相談江の島シンポジウム、東京工科大学、昭和59年1月、90-93頁）、シンポジウム話題提起（「大学におけるカウンセリングの展開——自己実現への援助的アプローチ」、第21回全国学生相談研修会報告書、東京家政大学、昭和58年11月、95-127頁）があった。

5. 教育臨床に関するもの。久しく開店休業していたが、この主題に入れられる研究を数えることができた。

一つは、「教育臨床場面における人間関係の調査研究」であり、丸井文男・村上英治両教授を中心とするものである。名古屋市内17区の小・中学校における、反社会的および非社会的行動問題の実情、教育的人間関係のあり方、対策等について、学校当事者の協力を得てまとめることができた（特定研究報告書「わが国における人間関係の比較的・総合的研究」名古屋大学教育学部、昭和59年3月、101-118頁所収）。

他に評論であるが「子どもの“よさ”を知るとのこと——教育における「ふれあい」の効用——」（教育展望、特集「ふれあい」の教育、1983年9月号、昭和58年9月、32-39頁）、「教育における共感と離反」（昭和58年度名古屋大学公開講座（東山地区）、コミュニケーション——その現状と未来、昭和58年9月、22-25頁）がある。なお後者は、次年度に名古屋大学出版会から『現代社会とコミュニケーション』として出版される手筈になっている。

6. その他の活動など。

「登校拒否の海外事例」サイコロジ、特集登校拒否—どう治療したらよいか。1983年9月号、No.42、サイエンス社、64-67頁。

「カウンセリングとは何か——その基本——。」小川捷之・山中康裕編『教育現場におけるカウンセリングのすすめ方』ライフ・サイエンス・センター、昭和58年10月、119-153頁。

てらぺいあ、季刊精神療法、第9巻4号、昭和58年10月、73頁。

カウンセリングの流れと我が国の現状、理学療法と作業療法、特集カウンセリング、第17巻12号、昭和58年12月、803-810頁。

(59.8.31記)